

# 後輩たちへのエール！ その2

2020年5月1日

## コロナウィルスのいま思うこと — 蔓延をこえて —

◇今回は、小森敦也さん（カフェ・アダチ経営）のエールです！

53 回生の小森敦也です。関市内で「アダチ」というコーヒーショップを経営しています。当地は私が創業したわけではなく、承継してから数年が経過したところ。世間は某ウィルスの蔓延により暗い影が落ちていますが、こうした日々の中でも刺す光を見ながら、経営にあたっています。多くの方がどうにも落ち着かない、不思議な気持ちで、フワフワした日常を過ごされていると思います。拭いきれない孤立感や無縁感があると思いますが、人格というのは、真に孤立無援のときにしか作られないのも、また事実です。このような時期に寄稿の依頼を受けた、その意味を想ったことをまず、このように冒頭に書きたいと思います。

私は学生時代を振り返るときも同様に、どうにも落ち着かない、不思議な気持ちになります。それは年月が遠く過ぎ去ったからばかりではありません。多くの学生時代を過ごした人たちが、自分の劣等感や何かの足りなさを思い返すのかもしれませんが、私はほとんどの場合、自身の回顧録は、自分ではないような人を思い出すことと相違ありません。学生生活というものがその後の人生に、何かの形でつながることを期待したり、線的なイメージをもって多くの方が過ごし、あるいは過ごすことを期待していると思いますが、私は生きることと学生生活を送ることのあいだに、とてつもない乖離を感じていました。そしてその「学生生活」という部分は、そのまま大きくなったとき

「社会人生活」という言葉成り代わるということは、火を見るよりあきらかでした。というか、学生生活においてその「成り代わり」の質だけをめぐり、あまりに大きなものが蠢いていることに、強烈な違和感を覚えていたという方が正しいのかもしれませんが。無知や反目、欲望や虚栄心、家庭生活や覚束ない個々の世界観など、すべてが仮構されたものに思えるばかりか、現実の一切がそこからはじまっている感覚に、めまいがしていたのです。私が下した決断はひとつでした。つまり、社会のルールから少し、はずれることです。



写真 ペルーにて

しかし、その後はそうなる前からどこか予感していた事との遭遇でした。個人的な気づきによって下した判断や気づき、行動原理というのはおそろしく単純であり、実は強度なく、近視眼的なもので、その「行き詰まり」は自身がはずれようとしたもの以上の捕縛感があったのです。

それから何年か経ち、私は正当に学生生活を送り、努力を成果に結びつける、そういう努力を怠らなかつた人たちと精神性以上に遠く離れていました。そんな場所から、人はどのように落ち着いた上向きの眼差しを取り戻すのでしょうか。私の場合、きっかけは、一杯のコーヒーと、それをめぐる人々との出会いでした。

学生生活を送る上に存在した出来事を軸にして、その後の人生というのはまわるのでしょうか。私にはよくわかりません。ただ偏差値序列的におさまりを見せ、そのまま空気の流れのようにほとんどの出来事が移行していく「学生生活」の中で、その部分に関してのみ単純な判断を下すのは、あまりに危ういことです。努力が万能とも思いません。間違った努力は、静かな絶望の累積です。あくまで私の場合には、自分の人生を手放したとき、自分の人生がうまくまわりはじめました。何につけても、時期というものはあるのかもしれませんが。しかし、人はいつも何かの中で静かに生きていて、決してそれは変えられない事です。学校でも家庭でも社会でも、ウィルスの蔓延する世界の中でもそうです。そしてそのことの見え方や、見えたものを消化するのにかかる時間と程度は、人によって本当に様々なのです。それをよく理解しておくことは、希望の過剰さを律する鍵にもなりうるし、もしかしたら取り返しのつかない絶望さえも、中和できる鍵になりうるかもしれません。

私はいま、地域を代表すると言われることの多いコーヒー屋の代表として、海外でコーヒー豆の買い付けをしたり、自家焙煎の珈琲を一人でも多くのお客様に届ける仕事をしています。自身を振り返るのは、やはり自分ではないような人を思い出すことと相違ありませんが、とても充実した毎日を過ごしています。



写真 インドネシアにて